

第 19 旅団司令部と京都連隊区司令部の来歴 — 京都教育大学内の戦争遺跡をめぐって —

武島 良成

Origin and History of the 19th Brigade Headquarters and the Kyoto Regimental District Headquarters
— Considering the War Ruins in Kyoto University of Education —

Yoshinari TAKESHIMA

Accepted June 28, 2010

抄録：本稿では、「軍都」伏見の実態を明らかにする作業の一環として、今までブラックボックスだった第 19 旅団司令部、京都連隊区司令部を取り上げて分析する。これらの建物の位置や遺構の比定を行い、機能や活動の様相について検証する。京都教育大学構内にある旧職員会館は、かつては第 19 旅団司令部だったが、太平洋戦争末期に地区司令部となり、連隊区司令官や部員の一部が兼務した。そのことが、「連隊区司令部」ないしは「連隊長室」という誤伝が生まれる原因になったのだろう。

索引語：戦争遺跡，太平洋戦争，第 2 次世界大戦，旅団，連隊区司令部

Abstract : In this paper, as part of the work to give a clear picture of the “Military City” in Kyoto City’s Fushimi Ward, I take up the analysis of the heretofore almost unknown 19th Brigade headquarters and the headquarters of the Kyoto regimental district. I estimated the location of the buildings or ruins and examined aspects of their functions and activities. What was once the campus staff center for the Kyoto University of Education had earlier been the 19th Brigade headquarters of the Japanese Imperial Army, and in the closing years of the Pacific War became the district command headquarters shared with the regimental district commanding officer and other staff. It could be that this was the cause of the misunderstanding for referring to it not only as the “Regimental District Headquarters”, but also as “Regimental Commander’s Office”.

Key Words : war ruins, the Pacific War, World War II, brigades, headquarters of regimental district

はじめに

戦争遺跡への社会的な関心が高まる中、京都市伏見区の京都教育大学は、構内に残っている旧第 19 旅団司令部（2009 年時点では職員会館）を改修し、大学史を中心とした博物館の機能を持たせようと

している。大学史と戦争遺跡の接合が強引ではあるが、取り壊しではなく建物が残ることは、文化財保護の面で一定の評価ができる。とはいえ、この措置は、建物への十分な理解にもとづいたものではなく、戦争遺跡がブームとなる中で、当局がとりあえず保護・保存しようとしたもののようである。京都市文化財課、大学当局、京都高等学校社会科研究会、『朝日新聞』などは、この建物を旧「第9連隊区司令部」と認識している（いた）が¹、連隊区司令部は地名を冠すものであり、実戦部隊の第9連隊とは別物である。また、1945年の一時期、連隊区司令部の部員が兼職として勤務したとはいえ、それまでの50年近く、この建物は旅団・歩兵团司令部として使われていた。「第9連隊区司令部」という言葉には、二重の誤解が含まれているのである²。

ここには、戦争遺跡がブームとなっている半面、遺構の分析が着実に進んでいない現状が現れている。京都教育大学の敷地に軍の広大な地下壕があったという誤解も、その一端を示すものだろう³。また、本稿でも言及する金沢の旧第6旅団司令部については、師団司令部と記している本が存在する[西ヶ谷恭弘, 2009年, p.5]。久居（三重県）の旧第30旅団司令部についても、連隊本部の建物と記しているものがある[三重県高等学校日本史研究会, 2007年, p.113]。このように虚実が混在した現状を見ると、歴史学の研究者には、より真剣に遺跡の比定・調査への取り組みが求められると言える。また、工事や予算の措置をとり得る立場にある者には、安易な判断や位置づけをしないことが求められる。

歴史学の研究者の戦争遺跡への関心が低い原因は、幾つか考えられる。教育・博物館・行政などの関係者との連携が必要で、話が学際的な性格を帯びていることも一因だろう⁴。大部分の歴史学の研究者は、「見せ方」「教え方」の検討を本業と考えておらず、戦争遺跡との間にも仕切りが出来ている⁵。また、筆者自身の内省に引きつけて言うならば、戦争遺跡を検討・解剖することで、社会に何を訴え得るのか、その成果が疑問視されていることも大きな要因ではないだろうか。もちろん、沖縄の戦跡や大久野島（広島県）の毒ガス製造工場の遺構が、戦争の悲惨さや恐ろしさを伝える好材料になるのは確かである。その教育的効果は、党派を超えて広く受け入れられるものと言え、近年の中学校の歴史教科書でも取り入れられている⁶。だが、陸軍の兵舎や旅団司令部、師団司令部の跡を紹介することが、同じ効果を生むとは限らない。場合によっては、生徒をいたずらに好戦的にしてしまうだけではないかということである。

さて、筆者は、戦時下の京都について、「軍都」というキーワードを意識して、数本の論稿を発表してきた。いずれも、教育や展示への援用を第一義に考えたものではないが、軍と溶け合った地域社会の様相も浮かび上がってくるなど、それなりの成果が得られたように思われる。それは、例えば、訓練を見られることに寛容だった陸軍の様子であり、軍以上に積極的に生徒を飛行兵として送り出そうとした文部省・学校の姿を見出したことだった⁷。それらを、直ちにわかりやすい形で展示などに組み込めるわけではないが、軍と地域社会の関係を直視しながら、民衆の戦争観を問うなどの視点が得られつつあるのではと思う。

本稿では引き続き、「軍都」伏見のどこで誰が何をしていたのかを明らかにしていく。まず、ブラックボックスだった旅団司令部、連隊区司令部について、建物の比定を一からやり直し、その上で機能や活動の様相を検証する。そして、この分析と資料館の位置づけの接点についても、若干の考察をなす。その際、第1章で、第19旅団司令部について分析し、第2章で、京都連隊区司令部について分析する。

第 1 章 第 19 旅団司令部について

第 1 節 建物の比定

1897 年（明治 30 年）、現在の京都教育大学の場所に、第 19 旅団司令部、京都連隊区司令部、歩兵第 38 連隊が設置された。これらの部隊は、大阪城に司令部を置く第 4 師団に所属し、日露戦争では旅団と連隊が出征した（1904 ～ 1905 年）。戦争中に第 16 師団が新設されると、3 隊は同師団に組み入れられることになった。同師団の司令部は、1907 年に、京都教育大学の北側の現聖母女学院の敷地につくられた。そのコンクリート造り 2 階建ての豪壮な建物は、現在でも保存されている。

3 隊の設置に当たり、陸軍省の臨時陸軍建築部長代理は、大山巖陸相に対し、現在の京都教育大学の敷地の南半分を「兵営」に充て、南東隅に「旅団司令部」を置く計画を提出した（1896 年 8 月 26 日付け、アジア歴史資料センターデータベース、C07041324500⁸）。この計画は、結局、「旅団司令部」と「兵営」の境界に、京都連隊区司令部を置くことに落ち着いたようである。京都教育大学教授を務めた水山高幸氏は、1922 年の地図を根拠に、これらの配置に言及しているが〔京都教育大学地理学科、1987 年、p.37〕、1911 年の「最新踏査京都新地図」、1913 年の「京都市街全図」、1915 年の「京都近傍図」でも、そのことは読み取れる。また、1920 年の「最新京都市街地図」では、連隊区司令部の区画に名称が入っていないが、歩兵連隊や旅団司令部と別の組織が入っていたことが示唆されている⁹。

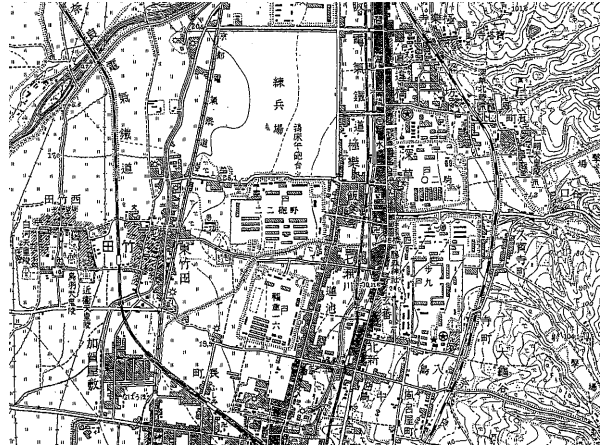
昭和に入ってから地形図でも、1931 年（昭和 6 年）部分修正の 2 万 5000 分の 1「京都東南部」で、南東隅の旧職員会館の位置（A）に、旅団司令部の記号がついている。兵営との境界の「昔の大学事務局」の位置（B）には、連隊区司令部の記号がついている。このように、（A）には第 19 旅団司令部、（B）には京都連隊区司令部が置かれたのである。



1. 第 19 旅団司令部（正面）
（2009 年 11 月に武島が撮影）中央の入り口は一旦塞がれていたが、修復にあたり再度開かれた。



2. 第 19 旅団司令部（床下）
（2009 年 11 月に武島が撮影）上方が司令部正面の入り口。床板を取り除くと、このようにレンガの土台が現れた。



3. 第6旅団司令部
(2010年3月に武島が撮影)金沢城内にあり、今回の第19旅団司令部の修復工事の参考とされた。

1931年部分修正 大日本帝国陸地測量部2万5000分の1「京都東南部」より
※誌面に合わせ、縮小している。

1910年(明治43年)5月には、第16師団経理部長が寺内正毅陸相に対し、旅団司令部と連隊区司令部に、軍用水道からの分水を願う書類を提出した。そこでは、この2つが標高40～50メートルの「高地斜面脚上ニ在リ」と書かれている(C02031336800)。この表現も、以上の地図と整合するものである。また、京都教育大学施設課所蔵の図面の中にも、(A)の建物を京都地区司令部と書き、(B)の建物を京都連隊区司令部と書き表したものがあつた。京都地区司令部については後述するが、(B)が連隊区司令部だったことは、この史料からも読み取れるのである。

後で述べる勤務者の多寡から考えても、小さな(A)の建物が、旅団司令部(後に歩兵团司令部)として使われ、大きな(B)が連隊区司令部として使われたというのは整合的な話である。また、明治後期につくられ、今も残る第6旅団司令部(金沢)、第30旅団司令部(久居)や、絵葉書に見られる第20旅団司令部(福知山)と、大きさや造作が類似していることも指摘できる¹⁰。正面の窓の配置は、中央部の左右に1ヶ所ずつ、やや離れて2ヶ所ずつであり、側面には3ヶ所分のスペースがある。(A)の建物の入り口に残っている三角屋根も、これらの司令部のものと共通するものである。これだけ酷似しているのは、臨時陸軍建築部長が、新設旅団司令部の規格を一律にしようとした結果なのだろう(C07041394500)。

以上の分析の他、桃山高等女学校の勤労働員で、京都連隊区司令部に通っていた松井カズ氏からも、(B)が連隊区司令部だという確認を得た¹¹。よつて、(A)が旅団司令部で、(B)が連隊区司令部だったというのは、確定したこととして話を進めても良いだろう。そして、そうであるなら、(A)の建物が造られたのは、第19旅団が設置された当初の1897年(明治30年)だったことになる。筆者は、2009年11月の改修作業の際に、(A)の建物の梁や壁の断面・床下などを目撃したが、最も古い部分は110年の歳月を経たものだったことになる。惜しまれるのは、戦後、任意に手が増えられ、どこまでが原状なのか正確にはわからないことである。また、同タイプの建物が何ヶ所もあることも、希少さを減じる材料になる。それでも、それなりに貴重な歴史遺産ではある。

第2節 司令部がたどつた道

次に、(A) の建物がどう使われたのか、その概要を時間軸に沿って追跡する。隣接する歩兵連隊の動静は部隊史などによってかなり知られており、筆者も陣中日誌を使って訓練の様子を紹介したことがある¹²。だが、第 19 旅団を中心に語ったものではなく、その点で新味を出せる筈である。

まず、第 19 旅団司令部が置かれたのは 1897 年のことだった。同司令部は、1904 ～ 1905 年の日露戦争で、隷下の歩兵第 38 連隊・歩兵第 9 連隊（大津）を率いて戦った。大正中期のシベリア出兵に際しては、第 19 旅団長（福原佳哉少将、千田嘉平少将）が「北滿州派遣隊司令官」となり、「満洲」北部への勢力拡大の道を探った。この後福原は、関東軍参謀長に転じ、大陸政策の前面に立ち続けることになった。

シベリア出兵が打ち切れ、「満洲」北部への勢力拡張も見送られた大正後期に、いわゆる宇垣軍縮が行われた。そして、陸軍は師団数の減少に伴う編成替えを行った。それにより、1925 年（大正 14 年）に、歩兵第 38 連隊が奈良に移駐し、大津の歩兵第 9 連隊の主力が跡地に移った。第 9 連隊はしばらくの間、大津に第 3 大隊を残したが、それも 1934 年に取りやめとなり、全部隊が京都に移駐した。編成替えの結果、第 19 旅団隷下の連隊は、京都に移った歩兵第 9 連隊と、福知山の歩兵第 20 連隊に替わった。

昭和になってからも第 16 師団・第 19 旅団と大陸の関わりは続き、1929 年～ 1931 年（昭和 4 ～ 6 年）には、関東州と満鉄の警護のために派遣された。師団司令部が駐屯したのは遼陽で、旅団司令部は、柳樹屯（大連郊外）を経て遼陽に移った。その後の軍制改革をめぐる論議の時にも、第 16 師団は一旦、朝鮮南部に永駐することが決められた。その際、大陸の師団を小規模な「軽師団」に改編しようとする動きもあり、旅団司令部が廃止される可能性も出てきた¹³。

結局、満洲事変（1931 年 9 月に勃発）の影響で軍制改革は中止となり、内地師団を「満洲」に派遣する方法が続き、第 16 師団は 1934 年～ 1936 年にも駐満した。帰還してから約 1 年後に、日中全面戦争が始まると、第 16 師団は隷下部隊をあげて、華北の平津地区に上陸した（1937 年 9 月）。ところが、石家荘まで進んだところで師団は華中に転用されることになり、11 月に上海の北方に上陸し直した。そのまま当時の中華民国の首都・南京に突進し、12 月には、他の部隊とともに南京事件を引き起こした。師団の左翼を担当した第 19 旅団の、虐殺との関わりについては、秦郁彦氏の総括を参照されたい [秦, 2007 年, pp.125-127]。また、旅団司令部の通信班長だった犬飼総一郎氏は、司令部の日々の様子について書き記している [犬飼, 1996 年]。

この後、第 16 師団の留守部隊を基幹に、「100 番」を追加した第 116 師団が編成され、華中に直行した（1938 年 5 月）。旅団も、師団同様に「100 番」を追加した第 119 旅団が編成され、鎮海湾要塞司令官だった石原常太郎少将を旅団長に迎えた。石原の着任はやや遅れたようなので、直接華中に向かい、京都で (A) の建物に入ることはなかったと考えられる。

第 116 師団は、以後終戦までずっと華中で行動したが、第 16 師団は 1939 年中期に京都に引き揚げた。この措置は、対ソ戦を睨んでのものだったと考えられ、第 19 旅団司令部は、(A) の建物に戻ったものと見られる。その後、太平洋戦争を前に、いよいよ日本陸軍は師団を歩兵 3 個連隊編成にすることにし、師団隷下の旅団は原則として廃止された。その代わりに、必要な時に師団の一部を指揮する含みで、歩兵団が置かれた。第 19 旅団は、1941 年 10 月に廃止となり、旅団長だった酒井直次中将（3 月進級）は、その少し前に第 15 師団長に栄転した。そして、京都連隊区司令官だった木村直樹少将が、第 16 歩兵団長に転任した。

太平洋戦争の開戦直前、第 16 師団はフィリピン上陸を目指して京都を離れ、その衛戍地に第 53 師

団が新設された。第 16 歩兵団司令部が出払った後には、第 16 師団隷下のもう 1 つの旅団だった第 30 旅団が、三重県の久居から移ってきて、第 53 歩兵団に横滑りした。師団に属した 2 つの旅団のうち、(A) の建物に置かれていた司令部が出征し、もう 1 つの旅団が名を変えて後釜に収まったことになる。

なお、フィリピンに向かった第 16 歩兵団司令部は、ルソン島の南東側のレガスピを攻撃する支隊を任された。皮肉なことに、隷下の主力部隊は、少し前まで第 30 旅団が指揮をしていた歩兵第 33 連隊だった。木村少将は、関わりの深い第 9・20 連隊の指揮から外れたまま、内南洋のパラオ島経由でルソン島に上陸したのだった。

この 2 年後の 1943 年末以後、第 53 師団もビルマに出征した。その後、(A) の建物は留守部隊が使ったのだろう。ただし、1945 年 2 月末以後、それらの留守部隊を基幹に第 153 師団が新設され、宇治山田方面の海岸を守るべく移動した。この時まで、フィリピンに渡った木村少将は、予備役ながら京都連隊区司令官に復帰していた。木村は、1945 年 3 月に新設された京都地区司令官を兼ねることになり、地区司令部が (A) の建物に置かれた。その態勢で、8 月の終戦を迎えることになった。

この地区司令部に言及した研究は少ないが、公刊戦史は、1945 年 4 月 24 日の陸軍次官の通牒などを使いつつ、制度の概要を紹介している〔防衛庁防衛研修所戦史室、1971 年、pp.253-257〕〔防衛庁防衛研修所戦史室、1975 年、p.88〕。それらによると、地区司令部の目的は、在郷軍人会と一体化した実戦部隊の組織にあり、連隊区司令部員のうち、司令官や、在郷軍人・青年学校担当者が、2 つの部を兼務したのだという。京都地区司令部の定員は 33 人（うち連隊区司令部との兼任が 7 人）で、小銃 36、軽機関銃 1 を装備し、通信班要員など 65 人を増加させることになっていた。一方、連隊区司令部が担っていた徴兵・動員・恩賞などの任務は、(B) の建物で続けられた。司令部の定員は 113 人（うち兼任が 8 人）とされ、兵器は軍刀・銃剣のみで、15～30 人を増加配属することになった¹⁴。

もっとも、既にこの時期には、どの部隊でも定員の充足は難しくなっていた。京都周辺では、空襲も激化しており、京都地区司令部の編成ははかどらず、なかなか実体を伴った組織にはならなかったことだろう。和歌山連隊区司令部勤務者の回想記には、自分が地区司令部に組み入れられたかどうかを、推測で書いているものがあるぐらいである〔西本信晴、1980 年、p.20〕。

第 3 節 旅団司令部の日常

上記のように、太平洋戦争最末期にかなり事情が変わったようだが、それまでの (A) の建物は、比較的静穏な環境に置かれていた。内閣印刷局が毎年刊行していた『職員録』を見ると、勤務者は、旅団長（通常は歩兵少将）の他、副官 2 人（歩兵少佐と歩兵大尉）と書記 2 人（歩兵曹長 2 人）が基本だったようである¹⁵。1935～1936 年に、朝鮮半島の京城（ソウル）で第 40 旅団長を務めた今村均（当時は少将）によると、旅団司令部には、この他に連隊から伝令当番が 2、3 人配属されていたというが〔今村均、1970 年、p.226〕、それを加えてもなお少数である。もっとも、1936 年 5 月に調製された、「満洲」警備からの帰還の手筈を記した史料では、第 19 旅団は将校が 3 人、下士官兵が 11 人となっている。出征などの際には、配属される下士官兵がもっと増やされたということだろう（C01003134800）。

これらの配属人員が使用する衛兵所が、明治期には存在したようである。だが、配属者は原隊（歩兵第 38 連隊）の衛兵所ばかりを使っているの、維持費が無駄になるとして、1909 年（明治 42 年）に廃止願いが出された（C07072650000）。ここで言う廃止とは、他の用途に転用するのではなく、完全に取り壊すということである。京都教育大学に残った各種の図面・航空写真でも、衛兵所に当たるような建物は確認できず、実際に取り壊されたと見られる¹⁶。

さて、旅団長の執務だが、1924～1926年に第19旅団長を務めた寺内寿一（当時は少将）の伝記に、複数の関係者の手記が収められている。それによると、寺内は京都ホテル（三条河原町）から葦毛の馬で通い、途中からは南禅寺の料亭の別荘に移ったということである。「御用も余りないのか悠然と乗馬にて通っておられました。おそくお出でになり、早く帰っておられました」という、称賛目的の伝記にふさわしくないような文までが収められている〔諫山春樹，1978年，p.170〕。

先の今村も、旅団長は「平時はたいして存在の必要がなく」「経理，兵器，衛生等のことには，全く関与する機能を持っていない」と記している。「旅団司令部条例」では，旅団長は歩兵連隊などを「統監」としてされているが（C08070148300），深く介入しなかったようである。そのため，「部下両連隊の野外訓練に臨む以外には，ひまの時間が多く，読書はいくらでも出来た」ということである〔今村均，1970年，pp.225-226〕。今村が言う読書とは，戦術・戦史などに触れることのようなものである。京都市がまとめた戦争遺跡紹介の中には，（A）の建物の中（東側）に，「兵要資料室」があったという記事がある〔京都市文化市民局文化財保護課，2005年，p.169〕。第19旅団でも，兵要資料を読み，戦術の研究をする旅団長が多かったのかもしれない。ただし，寺内の伝記には読書のことは出てこない¹⁷。

ところで，今村は，大隊以上の演習にはほとんど欠かさず出席したと記している。小隊・中隊規模の演習については，旅団長が一々顔を出しては煙たがられただろうし，小隊長や中隊長らの役割を侵すことにもなってしまう¹⁸。今村を含め，小部隊の演習に逐一顔を出す旅団長は少なかつただろう¹⁹。なお，師団の年間スケジュールは，1月に新兵を迎え，分隊，小隊，中隊規模の演習を順次行った上で，夏季から大隊，さらには連隊・旅団規模での演習を行うものだった。そのことからすれば，旅団長は，特に年度の前半は演習に立ち会う機会が限られ，時間を持て余す傾向が強かつたのかもしれない²⁰。

このような旅団長だが，激務をこなしていなかったとはいえ，窓際というわけではなかった。第19旅団長は，慣例が固まる前の大正期までには例外もあつたが，昭和に入ると，ずっと陸軍大学校の卒業生が占め続けた。大正期には，陸軍大学校を優等で卒業した福原佳哉や，先の寺内寿一のように将来の長州閥の中心としての期待も受けていた者が，旅団長を務めたこともあつた。出世コースの本流だったことに間違いはない。隣接する歩兵連隊の連隊長には，陸軍大学校卒業生はあまり多くなかつた。寺内の時代には，陸軍士官学校の同期生（第11期）でありながら階級が1つ下の江藤源九郎大佐が，第38連隊長を務めていたぐらいである（ただし奈良移転後の話）。第2章で扱う連隊区の司令官には，ある程度陸軍大学校卒業生が混じっていたが，どちらかといえば例外だった。それらと比べて，旅団長は花形だったのである。

（A）の建物は，1950年代に京都教育大学に引き継がれた後，学長室として使われたことがあつた。2009年時点では，周りに藪が生い茂つたため想像し難くなっているが，この建物は，京都教育大学の敷地の中で最も高所にある。旧軍以来，物理的・精神的にも上に立ち，「旗下の者」を見下ろしていたのである²¹。

第2章 京都連隊区司令部について

第1節 司令部の建物をめぐって

一方の京都連隊区司令部だが，設置は第19旅団・歩兵第38連隊と同じ1897年（明治30年）のこ

とだった。管見では、司令部の建物が 1917 年（大正 6 年）と 1925 年（大正 14 年）に増築されたことが確認できる。1917 年の増築時には、陸軍省がわざわざ、副官室、部員室、事務室、通路の仕切りを取り除き、全部を事務室にしろという指示を下していた（C03010933500）。他の連隊区司令部でも、手狭であることの解決や、命令を伝えやすくするために、同じようなことが行われていた²²。それでもまだ手狭だったためか、1925 年には、今度は大津連隊区司令部の建物を移し、増築することになった。その際、予算は総額 3270 円を目途にという制約も付された（C03012076200）。これはかなり抑えられた金額である。

こうして増築されたにもかかわらず、軍縮気運の中で、次第に司令部員は減らされたようである。『職員録』を見ると、一旦司令部附は下士官だけになり、京都連隊区司令部の人員は全部で 20 人程度しか記されなくなっている²³。和歌山連隊区関係者の回想記でも、一時は 20 人程度と数人の「小使い」だけになったとされている〔東，1980 年，p.49〕。京都も和歌山も、かなりの程度縮減されたのだろう。それが、日中戦争の勃発後、再び増員が始まった。『職員録』からは、司令部附として多数の士官が復活したことが確認できる²⁴。太平洋戦争開戦直後の 1942 年 4 月には、現役士官 6 人、予備役士官 6 人、下士官 26 人、判任文官 10 人の、計 48 人と報じられている（C01004963200）。和歌山連隊区は、終戦頃には 70～80 人ぐらいになったようだが〔東良親，1980 年，p.49〕〔上芝貞雄，1980 年，p.5 など〕、京都連隊区も同じぐらいには増えていたことだろう。先に見たように、1945 年の改編では、定員が一挙に 113 人になったが、それが充足されたかは不明である。

ところで、京都教育大学施設課が所有する終戦直後の航空写真では、(B) の建物は南東側を頂点とした逆 L 字型になっている。縮尺が大きく精度の高い 1915 年の「京都近傍図」で、東西に長い長方形に描かれていることからすれば、増築を経てこのような形状になったものと推測できる。京都教育大学が移転してきた後、(B) の建物は事務局となり、増築部分と考えられる東北側の広い部屋に会計課が置かれ、その南に庶務課が置かれた。L 字の南辺には、南東角の事務局長室以下、小部屋が並んだ。部屋の仕切りが戦前のものを踏襲していたとすれば、会計課の位置が「動員」事務に使われ、庶務課の位置がその他の事務に使われたのではなかろうか。南東角の事務局長室は、かつては連隊地区司令官室だっただろう。また、先の松井カズ氏によると、建物のすぐ南側（現在の京都教育大学正門の辺り）に、出入り口があったのだという。正式な門かどうかはわからないが、衛兵もいたということである²⁵。

なお、和歌山連隊区司令部は、日中戦争の段階で、女性の「筆生」を大量に採用したようである〔上芝貞雄，1980 年，p.6〕〔東良親，1980 年，p.49〕〔東尾静子，1980 年，p.65-66〕〔田井秀子，1980 年，p.86 など〕。京都連隊区司令部についても、女学生の勤労働員が確認できる²⁶。さらに、女子職員の公募もなされた²⁷。和歌山では、5 組が結婚するロマンスがあったようだが〔東良親，1980 年，p.63〕、同じようなことが京都であったのかはわからない。それでも、女性が多いという意味で、異例と言える環境になっていたことは間違いない。

第 2 節 連隊区司令部の日常

京都連隊区司令部は、1925 年の宇垣軍縮までは、京都府南部を所管地域として業務をこなしていた。軍縮で大津連隊区司令部が廃止されると、滋賀県の大部分も管轄することになった。1941 年に 1 県 1 連隊区司令部が原則となると、滋賀県は管轄でなくなり、代わりに京都府北部を対象に含むようになった（福知山連隊区司令部は 1942 年に廃止）。京都師団の兵員は、京都・津・福井・大津連隊区司令部

によって供給されることになったのだった。

司令部の業務の様相については、管見の限り、防衛省防衛研究所図書館が所蔵する、各地の「連隊区司令部歴史」の類が最も参考になる。その多くは、宇垣軍縮による廃止時に調製されたものだが、特に篠山連隊区司令部のものは、動員・徴兵・在郷軍人の状況などを 20 年にわたって日誌化しており、有用である²⁸。また、1945 年 4 月までの状況を綴った松江連隊区司令部のものも貴重である²⁹。京都連隊区司令部のものは未見（或いは未調製）だが、同司令部の状況も、これらの他地域の様相を援用して理解することができるだろう。

業務の中心となる動員の实態については、周知のように、富山県庄下村の兵事係資料の発掘により、研究が急速に進展した³⁰。また、1996 年 8 月 1 日放送の NHK スペシャル「赤紙が来た村」や、番組を再構成・加筆して刊行された『赤紙』（1997 年）も、質の高いジャーナリズムの成果だといえる。これらによって、連隊区司令部が、役場からの情報をもとに在郷軍人名簿をつくり、それをもとに召集するシステムが広く紹介された〔小沢眞人，NHK 取材班，1997 年〕。京都に近いところでも、2009 年 8 月に TBS 系で放送されたテレビ番組で、大津連隊区司令部で赤紙を書いていた女性の話が紹介されている³¹。

もっとも、既に 1980 年の時点で、和歌山連隊区司令部関係者の回想記集が刊行されており、動員の实態は概ね明らかにされてはいた〔東良親ほか，1980 年〕。そこで浮かび上がる日常の光景は、役場からの連絡にもとづき、徴兵原簿を手直しし、陸軍省が命令する数に従って割り当てを決める様子である。さらに、召集令状（赤紙）を作成し、司令部勤務者が警察（或いは市役所）をまわって赤紙を手渡す様子。警官が町や村の役場に赤紙を持っていき、役場の兵事課の人員が、召集の対象者に手渡す様子である。この回想記集では、とにかく忙しかったという記事が目につくが、よく読むと、日中戦争が始まるまではある程度余裕があったこともわかる³²。灯火管制で締め切った室内に籠り、連日のように徹夜して作業をした時期は限定されるのだろう。

また、動員業務の機密の度合いについても、NHK の『赤紙』が強調する程のものではなかったことが推測できる。『赤紙』は、動員班は特別な部屋で作業し、部屋には上官など一部の人間しか入ることが許されず、守秘義務が徹底していたとしている〔小沢眞人，NHK 取材班，1997 年，p.151〕。しかし、和歌山連隊区司令部には、先に見たように、軍人でない女性が大量に勤務していた。京都連隊区司令部でも、桃山高等女学校の女学生が、クラス単位の大人数で部屋に入り、葉書に名前を書く業務をこなしていた。また、先に述べたように、女子職員も公募されていた。筆者は、京都師団は見られることに寛容だったと記したことがあるが、軍機の感覚はかなり緩やかだったのではないだろうか。

まとめに代えて

第 19 旅団司令部・京都連隊区司令部の建物と、その周辺の空間は、以上のような来歴を持っていた。これまでも筆者は、歩兵連隊、砲兵連隊、工兵連隊の衛戍地の様相を分析してきたが、不明な部分が埋まり、「軍都」伏見という空間の实態は、より明瞭になった。第 16 師団を頂点とする命令系統が、この空間でどう機能していたのかも、よりはっきりしてきた。

また、第 19 旅団司令部が、「連隊区司令部」と説明されていた理由については、次のように考えられる。この司令部庁舎は、1941 年秋までは第 19 旅団司令部、それ以後は新設諸師団の歩兵団司令部で

あり、1945 年春に京都地区司令部となって、連隊区司令官以下、職員の一部が兼務した。その状態で終戦になったが、「地区司令部」という名称が耳慣れないものだったために、連隊区司令部が使った建物として記憶されることになったのだろう。2010 年 3 月現在、京都教育大学当局は、旧職員会館が第 19 旅団司令部だったことを認め、金沢の第 6 旅団司令部の測量をして復元の参考にするなど、筆者の分析を受け入れてくれている。今後も、資料館の建設や、教材としての使用の前提として、この分析を活用してもらえれば幸いに思う。

ただ、2010 年 1 月に大学当局が発表した、この建物への「まなびの森ミュージアム」という命名に、違和感を覚えたことは否定できない。この名称が、旅団長が戦術を研究し、戦い方を「まなぶ」場だったことにあやかろうというブラックジョークではないことを、まずは祈りたい。だが、そうでなくとも、旧軍に関する記憶を棚上げした上で、ファンタジックに「まなびの森」と言うだけでは、この建物を占有・使用する意味が問われることになる。このようなミスマッチは、文化財の保存と、施設の有効利用の板挟みの中で、今後も全国的に起こり得る現象だと思われ、継続的に考えていかねばならない問題であろう。

なお、今回の分析の主題ではなかったが、日本軍の「見られること」への寛容さについては、従来以上に強調できそうである。これも、別稿で述べてきたことだが、軍の訓練は、普段から住民に見られていたし、京都ではそれを遮ろうとする積極的な動きもなかった。軍と住民は、必ずしも緊張関係にはなく、共存していたのだ。今回、連隊区司令部への女性の勤務の件を紹介したが、京都連隊区司令部で奉仕した桃山高等女学校の女学生たちは、特別に身元調査を受けたわけではなかったようである。和歌山連隊区司令部における、勤務女性と将兵が結婚した事例の多さも、緊張関係のみを強調できるわけではないことを示唆しているだろう。

また、連隊区司令部に勤務した「小使い」たちにも注目したい。彼らは建物の管理や連絡のために常駐し、その気になれば機密事項に触れることもできた筈である。軍人たちは、彼らの存在をあまり気に留めていなかったようだが、そのことの意味も検討に値するだろう。均質化が進む前の日本社会のあり方の、一端を示すものと言えるかもしれない。いずれにせよ、軍人でない者が機密を耳にできる緩さがあったという見方は、補強できる。

注

¹ [京都市文化市民局文化財保護課、2005 年、p.169]。2009 年 11 ～ 12 月の京都教育大学当局の教授会・電子メールでの通知。[京都高等学校社会科研究会、2000 年、pp.116-117]、『朝日新聞（京都版）』2008 年 1 月 28 日など。また、「連隊区司令部」から派生したものだろうが、「連隊長室」だったという説明も、京都教育大学内では頻繁になされていた。

² 京都教育大学関係者の中でも、地理学教授を務めた水山高幸氏は、1980 年の随筆で、1922 年製の地図（おそらく陸地測量部測量の 2 万 5000 分の 1 地形図）をあげつつ、この建物が旅団司令部だということを明記していた [京都教育大学地理学科、1987 年、p.37]。このことが、大学関係者にほとんど伝承されないままだったことになる。

³ この件は、[十菱駿武、菊池実、2002 年、p.206] や [戦争遺跡保存全国ネットワーク、2004 年、p.207] に記されている。

- ⁴ 歴史学者が本格的に参入した成果として、[国立歴史民俗博物館, 2006 年] があるが、これも博物館展示の図録であり、学際性を帯びている。
- ⁵ この点について、歴史学者の一般的な姿勢を擁護するとすれば、金子淳氏が述べるような、「戦争資料はその意味づけの恣意性があらかじめ仕込まれた危うい存在」だという指摘が示唆に富む。金子氏は、戦争資料の活用・学習には、「展示空間におけるリアリティの背後にどのような文脈が流れているのかを自覚的に問い続けていく以外に方法はない」と展望している[金子淳, 2006 年, p.331]。この展望は、歴史学者が広く共有している感覚だと言えよう。
- ⁶ 2001 年検定教科書では、東京書籍版が、原爆ドームの他、広島城周辺の軍用施設をあげている[田辺裕ほか, 2002 年, pp.178-179]。大阪書籍版は、原爆ドームの他、奈良県香芝市の地下壕、大久野島の毒ガス工場、サイパン島に残る日本軍の兵器の残骸をあげている[熱田公ほか, 2002 年, pp.175-176 とその後の折り込み]。2005 年検定教科書では、東京書籍版は原爆ドームの他、安里配水池をあげている[五味文彦ほか, 2006 年, pp.195-196, p.217]。大阪書籍版は原爆ドームをあげている[鈴木正幸ほか, 2006 年, p.203]。
- ⁷ 陸軍の訓練については[武島良成, 2006 年 a] [武島良成, 2006 年 b] を、飛行兵については[武島良成, 2007 年] を参照。
- ⁸ C07041324500 というのは資料番号を示す。アジア歴史資料センターのデータベースは、資料番号で検索するのが確実であり、以下この番号を記していく。
- ⁹ 1911 年, 1913 年, 1920 年の地図は、国際日本文化研究センターのデータベースによる。地図番号は、順に 002697498, 002754893, 000988907。1915 年の地図は、陸地測量部が発行した 1 万分の 1 のもので、[大塚隆, 1994 年, p.120] に収められたものを参照した。
- ¹⁰ 第 6 旅団司令部については、金沢城公園のホームページが詳しい解説を付けている(<http://www.pref.ishikawa.jp/siro-niwa/kanazawajou/>)。第 30 旅団司令部については、三重県戦争資料館のホームページを参照(<http://www.pref.mie.jp/FUKUSHI/heiwa/siryou/07-04.htm>)。第 20 旅団司令部については、個人ホームページ「まちかどの西洋館」で紹介されている絵葉書を参照した(<http://thnr2001.hp.infoseek.co.jp/>)。
- ¹¹ この聞き取りは、当初砺波有希氏が行ったもので、その内容は、個人ホームページ(<http://www.shc.usp.ac.jp/kyouraku/seminar/negoto/sobo-log.htm>) で公開されている。筆者は砺波氏に立ち会ってもらい、2010 年 1 月に聞き取りを行った。松井氏によると、この建物に 5・6 回通ったということである。
- ¹² [武島良成, 2006 年]。部隊史の中では、[帝国連隊史刊行会, 1918 年] [野口俊夫, 1963 年] が特に参考になる。
- ¹³ 第 16 師団などの「軽師団」化については、[小林, 2010 年, pp.134-149] を参照。ただし、陸軍省が 1931 年 12 月に調製した「陸軍軍制改革ト行政財政整理ノ概要」(A08072189000) では、第 19 師団(羅南)の編成はそのままとされており、満鮮の全ての師団が「軽師団」化されることになったわけではない。「昭和 6 年度予定工事ノ件」(C01006448900) のように、同年 8 月 22 日の時点で、第 19 師団が「軽師団」化の対象から外されていたことがわかる史料もある。
- ¹⁴ このような連隊区司令部の機構強化・拡充については、1945 年 3 月 23 日の衆議院請願委員会でも言及されていた(『京都新聞』1945 年 3 月 24 日)。
- ¹⁵ 例えば、1922 年(大正 11 年) 7 月 1 日現在、副官は野中宇八少佐と村尾輯清大尉、書記は村田勘

蔵曹長と小島計太郎曹長だった（A09054438700）。

- 16 1915 年の「京都近傍図」などに、司令部の南東に小さな建物が記載されているが、これは衛兵所ではなく、入り口を守る立哨の雨除けだっただろう。
- 17 寺内は、退任時に新聞社が行ったインタビューに対し、勇ましい話はせずに、京都への愛着や基や茶の友人ができたことを語っている。寺内は、このような趣味に時間を使ったのかもしれない（『京都日出新聞』1926 年 3 月 5 日）。
- 18 福田雅太郎大将の伝記では、明治末期の第 24 旅団長時代のこととして、訓練を視察しても講評や批判をしなかったと書かれている。「連隊長や大隊長は多忙だから、旅団長が協力加勢するのだ」という表記を含め、一步引いたところにある旅団長の立場が窺える〔黒板勝美, 1937 年, pp.232-233〕。
- 19 1922 ～ 1924 年に第 2 旅団長（佐倉）を務めた奥平俊蔵（当時は少将）も、その回想記に、「検閲等是非視察を要する場合に於て十分に視察する事とし其他に於ては連隊の迷惑を顧慮して多く行かず」と記している。その代わり、奥平は基準に不満を持ち、隷下部隊の検閲には介入したようである。ただし、そのようなことをする者は少なかったということである〔栗原宏, 1983 年, pp.231-232 など〕。
- 20 暇だったというのは砲兵旅団にも当てはまったようで、畑俊六元帥は 1926 ～ 1927 年の野戦重砲兵第 4 旅団長時代のことを振り返り、「閑役」だったと記している〔伊藤隆ほか, 2009 年, p.135〕。
- 21 金沢の第 6 旅団司令部や、敦賀の第 18 旅団司令部も、歩兵連隊を見下ろす一段高いところに置かれていた。姫路の第 8 旅団司令部も、僅かだが歩兵連隊より高いところにあった。だが、一方で、大阪の第 7 旅団、久居の第 30 旅団、和歌山の第 32 旅団のように、歩兵連隊と高低差のないところに置かれた司令部も多かった。
- 22 本郷連隊区司令部、松山連隊区司令部、大津連隊区司令部などの事例が知られる（C07072716800, C07072160200, 防衛省防衛研究所所蔵の「大津連隊区司令部歴史」）。
- 23 例えば、満洲事変直前の 1931 年 7 月 1 日現在の『職員録』には、司令官、副官、3 人の部員の他、司令部附の下士官 13 人と、属員 1 人の名が載っているだけである（A09054442500）。
- 24 1939 年 7 月 1 日現在の職員録には、司令部附の中尉 3 人、少尉 1 人の名がある。1 年前には、司令部附に士官はいなかった（A09054445500）。
- 25 この点に関し、水山高幸氏は、南側に 3 つの門があったとしているが〔京都教育大学地理学科, 1987 年, p.37〕、精度の高い「京都近傍図」では、1ヶ所（現在の京都教育大学の正門の位置）しか読み取れない。なお、この地図によると、門を入った右側に立哨用の小さな建物があったようである。ここには、現在、京都教育大学の門衛所がある。
- 26 松井カズ氏によると、1944 年頃に、兵隊の名簿づくりを手伝ったのだという。1 回の奉仕に 1 クラス（約 50 人）で行き、3 クラスで交替したということである。
- 27 『京都新聞』1945 年 2 月 9 日。この日の同紙に、若干名を募集するという記事がある。募集条件は、高等女学校卒業程度の学歴を持つ 18 歳以上 27 歳までの者で、京都市内の健常者に限るということである。
- 28 原本の表紙は「歴史 篠山連隊区司令部」。同司令部が、1925 年に調製したもののものである。
- 29 原本の表紙は、「松江連隊区司令部歴史」（上巻・下巻）。1915 ～ 1945 年の状況を日誌化している。
- 30 〔庄下村史誌編纂委員会, 1979 年, p.480-502〕では、兵事関係記録書類が写真で紹介され、詳しい解説も付けられた。その後、〔黒田俊雄, 1988 年〕に、資料を提供した出分重信氏への聞き取りと手

記が掲載された。

³¹ 2009 年 8 月 10 日放送の「最後の赤紙配達人」で紹介された。

³² [東, 1980 年] の 46 頁では、まだしも余裕があった時期の娯楽について記されている。48 頁以降では、日中戦争以後の激務について詳述されている。

文献一覧

1. 『朝日新聞（京都版）』2008 年 1 月 28 日
2. 熱田公ほか, 2002 年, 『中学社会 歴史的分野』, 大阪書籍
3. 防衛庁防衛研修所戦史室, 1971 年, 『本土決戦準備』1, 朝雲新聞社
4. 防衛庁防衛研修所戦史室, 1975 年, 『大本営陸軍部』10, 朝雲新聞社
5. 秦郁彦, 2007 年, 『南京事件（増補版）』, 中央公論新社
6. 東良親, 1980 年, 「和歌山連隊区司令部回顧」, 東良親ほか編『和歌山連隊区司令部 和歌山地区司令部 回顧録』, われん会: 43-64 頁
7. 東尾静子, 1980 年, 「袴からモンペイへ」, 東良親ほか編『和歌山連隊区司令部 和歌山地区司令部 回顧録』, われん会: 65-66 頁
8. 今村均, 1970 年（1980 年改題）, 『今村均回顧録』, 芙蓉書房
9. 犬飼総一郎, 1996 年, 「南京攻防戦の実相」, 出口範樹編『軍司令官と師団長』（『丸』1996 年 4 月別冊）, 潮書房: 226-244 頁
10. 諫山春樹, 1978 年, 「寺内元帥を偲びて」, 上法快男編『元帥寺内寿一』, 芙蓉書房: 169-171 頁
11. 伊藤隆ほか監修, 2009 年, 『元帥畑俊六回顧録』, 錦正社
12. 五味文彦ほか, 2006 年, 『新編 新しい社会 歴史』, 東京書籍
13. 金子淳, 2006 年, 「戦争資料のリアリティ」, 倉沢愛子ほか編『岩波講座 アジア・太平洋戦争』6, 岩波書店: 327-352 頁
14. 小林道彦, 2010 年, 『政党内閣の崩壊と満州事変』, ミネルヴァ書房
15. 国立歴史民俗博物館, 2006 年, 『佐倉連隊にみる戦争の時代』, 国立歴史民俗博物館
16. 栗原宏編, 奥平俊蔵著, 1983 年, 『不器用な自画像—陸軍中将奥平俊蔵自叙伝—』, 柏書房
17. 黒田俊雄編, 1988 年, 『村と戦争』, 桂書房
18. 黒板勝美, 1937 年, 『福田大将伝』, 福田大将伝記刊行会
19. 『京都日出新聞』1926 年 3 月 5 日
20. 京都高等学校社会科学研究会編, 2000 年, 『京都に強くなる 75 章』, かもがわ出版
21. 京都教育大学地理学科, 1987 年, 『水山高幸先生退官記念誌 紫野から藤森へ』
22. 京都市文化市民局文化財保護課編, 2005 年, 『京都市の近代化遺産』産業遺産編, 京都市文化市民局文化財保護課
23. 『京都新聞』1945 年 2 月 9 日, 3 月 24 日
24. 三重県高等学校日本史研究会, 2007 年, 『三重県の歴史散歩』, 山川出版社
25. 西ヶ谷恭弘監修, 2009 年, 『金沢城』（新版名城を歩く 3）, PHP 研究所
26. 西本信晴, 1980 年, 「追憶」, 東良親ほか編『和歌山連隊区司令部 和歌山地区司令部 回顧録』,

われん会：13-22 頁

27. 野口俊夫，1963 年，『奈良連隊戦記』，大和タイムス社
28. 大塚隆編，1994 年，『慶長昭和 京都新聞地図集成』，柏書房
29. 小沢真人，NHK 取材班，1997 年，『赤紙』，創元社
30. 戦争遺跡保存全国ネットワーク編，2004 年，『日本の戦争遺跡』，平凡社
31. 鈴木正幸ほか，2006 年，『中学社会 歴史的分野』，大阪書籍
32. 庄下村史誌編纂委員会編，1979 年，『庄下村史誌』，庄下地区自治振興会
33. 田井秀子，1980 年，「熊谷寺にて」，東良親ほか編『和歌山連隊区司令部 和歌山地区司令部 回顧録』，われん会：86-87 頁
34. 武島良成，2006 年，「京都師団の日常—文献史料による「戦争遺跡」の検証—」，『京都教育大学紀要』108 号，京都教育大学図書館：33-51 頁
35. 武島良成，2006 年，「伏見の工兵隊—工兵はそこで何をしていたのか—」，『京都教育大学紀要』109 号，京都教育大学図書館：15-29 頁
36. 武島良成，2007 年，「戦時期の京都における中等学校の滑空訓練」，『京都教育大学紀要』110 号，京都教育大学図書館：13-30 頁
37. 田辺裕ほか，2002 年，『新しい社会 歴史』，東京書籍
38. 帝国連隊史刊行会編，『歩兵第三十八連隊史』，1918 年，帝国連隊史刊行会
39. 十菱駿武，菊池実編，2002 年，『しらべる戦争遺跡の事典』，柏書房
40. 上芝貞雄，1980 年，「動員室勤務時代の思い出」，東良親ほか編『和歌山連隊区司令部 和歌山地区司令部 回顧録』，われん会：1-12 頁

防衛省防衛研究所図書館所蔵史料

1. 「大津連隊区司令部歴史」（中央，部隊歴史連隊，304）
2. 「松江連隊区司令部歴史」（上巻・下巻）（中央，部隊歴史連隊，375）
3. 「歴史 篠山連隊区司令部」（中央，部隊歴史連隊，537）

アジア歴史資料センターデータベース

- A08072189000（陸軍軍制改革ト行政財政整理ノ概要）
A09054442500（昭和 6 年 7 月 1 日・職員録）
A09054445500（昭和 14 年 1 月 20 日・職員録）
A09054438700（大正 11 年 7 月 1 日・職員録）
C01003134800（臨命第 318 号ニ基ク第 16 師団内地帰還船舶輸送ノ件報告）
C01004963200（連隊区司令部廃止並編制改正完結ニ伴フ関係諸表提出ノ件報告）
C01006448900（昭和 6 年度予定工事ノ件）
C02031336800（歩兵第 19 旅団司令部其他水道布設ノ件）

C03010933500（大正 6 年度工事実施ノ件）
C03012076200（京都連隊区司令部庁舎増築工事ノ件）
C07041324500（伏見深草村旅団司令部等位置ノ件）
C07041394500（新設旅団司令部配置ノ件）
C07072160200（松山連隊区司令部事務室模様替ノ件）
C07072650000（歩兵第 19 旅団司令部衛兵所及附属厠解崩処分ノ件）
C07072716800（本郷連隊区司令部事務所間仕切其他模様替工事ノ件）
C08070149300（旅団司令部条例制定）

国際日本文化研究センター所蔵地図データベース

000988907（最新京都市街地図，1920 年，大淵善吉）
002697498（最新踏査京都新地図，1911 年，小林寿）
002754893（京都市街全図，1913 年，斎藤良次郎）

ホームページ

金沢城公園

<http://www.pref.ishikawa.jp/siro-niwa/kanazawajou/>

三重県戦争資料館

<http://www.pref.mie.jp/FUKUSHI/heiwa/siryou/07-04.htm>

個人ホームページ「まちかどの西洋館」

<http://thnr2001.hp.infoseek.co.jp>

個人ホームページ「祖母たちの時代 戦争・労働・家族」

<http://www.shc.usp.ac.jp/kyouraku/seminar/negoto/sobo-log.htm>